

# 源氏冷泉節

## 上之卷

下行く水云々  
零落せし源氏が  
段々と名高くな  
るをいふ

花の朝云々  
秋の景色につけ  
て

粉はぬ花一  
夕日影さすか  
と見え  
て雲間より  
粉はぬ花  
の色ぞ近  
づく  
(續拾遺集)

見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん。年は安元二年の冬の日數も積る雪、  
下行水の音までも嵐に咽ぶ源の、右兵衛佐頼朝は平治の亂に流人と成り、伊豆の配所の憂、  
住居。伊東の次郎祐親は、當國一の大名とて、深く頼み在ませば、伊東が一族本間瀧谷  
大場槽谷會我岡崎、「今こそ平家の郎從なれ。昔の恩を忘れじ」と、花の朝に霞汲、紅葉  
を焚月の暮、時に隨ひ折に觸御心を慰むる、人の情に佐殿も、打解月日をおくり給へば、  
近國の若侍 吉川船越佐越の千郎、天野の藤内狩野の藤五、竹の下孫八杯を始として、「卒  
や殿原、流人右兵衛佐殿の、御冬籠の徒然を慰め申さん」尤と人別に一種一瓶して、冷  
る野掛の暖め酒、籠に梵む石橋山、拂はぬ雪も盃の、醉に解つと吹下す、峯の吹雪も御酒宴  
の、ざよんざ調る計なり。佐殿興に入り給ひ、「實にも榮ある景色やな。粉はぬ花と詠せし

松の雪云々  
松の雪のみ暖か  
けりて云々  
宋摺花

東方朔漢文帝  
に仕へて翻あり  
或時西王母の桃  
を竊み食ひ仙人  
となれりと傳ふ

名に立つ末野  
我曲は名に立  
つ末の松山か空  
より浪の越えぬ  
まぞなき源氏  
末摺花

海の幸一見火  
降命自有海幸  
弟彦火出見命  
自有山幸云々  
日本書紀

は、咲ぬ梢も有つべし。楨も檜原も押靡て、咲きも残さぬ花の雪、折らでも袖に搔入て、歸る家路も入る山も、白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも、共に凍りて松の雪、暖氣なると書たるも是ならん。峯の梢の滴りは、氷柱と成て谷陰に、音無き漣の白糸に、群集る鳥も埋れて、皆白鷺と山の井の、氷の鏡と己れさへ、影に驚く翫や、はつと掃へば色々に、鷺も鳥も現れて、雪に繪を描く風情かや。雲居る方は何國ぞと、土肥の杉山奥深く、爪木の道も袖人の、通行も絶て是や此、東方朔が杳の跡、誰炭竈の薄煙、横斷る風に簇々と、消て亂るゝ幾條の、末は結びて靡合ひ、折臥岡の偃蓋松、己と枝の起反り、さらく颯と翻ると其景色、名に立つ末野と言置し、末摺花の閨の雪、花に擬へて吉野山、月に譬て更科を、更に見るよと見下せば、伊豆の海面遙々と、漕來る舟の數々の、苦も舳板も埋れて、雪に聲あるから櫓の音の、からりころくくやらんやら。お目出鯛釣る海の幸、雪は貢の山の幸、彼山海の幸がへせし、神代を今に見る事は、再び頼朝が秋津島の海山を、手に握るべき兆ぞ」と、數獻に廻る御盃。「曉梁王の園に入らざれども、雪群山に滿。夜度公が樓に登らねども、月千里に明なり」と、朗詠を遊ばせば、御馳走の若侍、今様を唄ひ舞、辨當合子の足利櫛、盞を變ての雪見酒、寒風却て春風と、左扇の

歡樂に、暫時御座をぞ召されける。伊東が三男九郎祐清盃受持ち、「如何に方々、數ならね共父祐親、我君を隱匿參らせ、御浪人の御徒然を慰奉る處に、各近國の交誼とて、今日ふの御馳走ごちそう、身に取ての大慶たいけい、君も甚だ御満足。去りながら春の雪間の比ひならば、猪熊しぐまなどを狩出し、物頭に馬合つけ、鎬の遠鳴させざるが残念なり」と言ひければ、竹の下たけのしたの孫八間も敢ず、「否豫いやかねも催す鹿狩こそ、馬をも卒せこ子をも頼むべけれ。一座一興の御遊覽ごいうらん卒いそや面々雪の下伏したふす兎狸うさぎたぬき、手捉てとらに引摺ひつつかみ熊猪くまのしを抜打ぬきうちにして、熊膽くまのあめの苦味にくみを肴さかなに、一盃ぶつは如何いかに」と云へば、藤内藤五會澤ふじうち とうご さいわいの彌五郎やごろう、「ヲ、美いくも申されし。鳥獸とりけものの血ちに染そて、紅葉もみぢの山やまに爲すべし」と、一盃機嫌はんざんの阪東武者はんとうぶしや、雪ゆきを踏立ふみたて氷こほりを蹴割けわり、谷たにに降り尾上おのへに登のぼり、えいゝ聲こゑして、三重みへ狩かりけるが、雉子さびの一羽ひとも立たずして、樞柴すゐし茂しげる斑消じらぎえに、齒し袋だの葉は被かぎ折をり敷しきて、蠢うごき出いでるを、「スハ伏猪ふするよ、我仕留わしどめん」と駈かけ寄よれば、非人ひにんと覺おぼしく二十許はたはちかりの瘦男やせおとこ、鬢おんも棘とげにつらよるて、唇寒くちびるさむいき呼吸こその下した、「唯御憐おんあはれみ御助おんたすけ」と、凍臥こゑふしてぞ泣なき居ゐたる。情なさけも知らぬ田舎武士いんやぶし、「是れ珍重ちんじゆうの御おん慰なぐさ、瘦やせても人間鹿熊しんかうまよりは勝まさなり。首討くびうつは常つねの事こと、胴切たせわりか縦割たてわりか斜斷はすぎりか」とぞ立騒たてさわぐ。頼朝御覽よりちかみじ、「須臾しゆゑん候まを。山やま中なかと云いひ雪中ゆきちゆうに、非人ひにんの在あるべき様さまはなし。抑おさも汝なは如何いかなる者ものぞ」と宣のたまへば、此男頭かしらもたを擡もたけ、「我等われらは相州さうしゆう

小竹筒―竹筒の  
食器交野―河内にあ  
り、難しにかく

の土民なるが、永く脚氣を煩ひ、僅少の田地にも離れ、妻には飽ぬ別れを致し、何を生たる甲斐の國、少しの縁者を尋ねて、是迄膝行參りしが、山道の大雪に持病の痛骨も碎け、一足も曳れず凍死する口惜さ。御推量遊ばせ。ア、痛々」と顔顰涙を流すぞ不便なる。若者共打笑ひ、「然れば何國の咎もなし。むだくと凍死なんより、源氏右兵衛佐殿の、御手に掛つて成佛せい。サア御慰みに大袈裟を遊ばせ。我々は一の胴二の胴、毛脇提燈八枚目。雪を土壇の試物、珍らしからん」と鬨くにぞ、頼朝は仁心深く、無益の事とは覺せども、今は彼等が情にて、世を詔らふ頼朝なり。氣に背きては悪かりなんと、莞爾と笑ひ、「さる事なれ共去りながら、熊猪の代ならば、彼奴に小竹筒の食事を與へ、力一杯逃させ追詰て討取るこそ、狩の學びの遊興ならめ。それく」と有ければ、侍實に御尤。サア今が最後ぞ。腹は裂ふが破れふが一生の喰徳。先餓鬼道は氣遣ひなし」と、酒飯口に押入々々「走れく」とどよみをつくり手を叩く。無慮やな遁れても、遁れ交野の疲の雉の、逃るとすれど足立す。這ふつ膝行つ搔分けて、雪をば口に息繼の、潤す咽も渴き果、叫ぶに聲も出ばこそ。頼朝は唯助けんと、態と雪に踏込々々、追附難て見へ給へば、侍取逃しては不覺なり。お先へ廻つて打ち留めよ」と、皆々谷へぞ降たりける。頼

朝は「ヤレ狼狽者、此隙に何國へも、逃て助かれ」と、呼はり給へば手を合せ、非ア、御恩徳有難し」と、喜びても隠所なく、七抱餘りの古木の楠の、空虚の洞にやうやうと、這ふく助かり入にけり。頼朝空洞を差覗き、「扱深山の奇特とて、何千年にか成ぬらん。斯る古木も有るものか。此空洞の深き事、假令ば十人二十人、五日七日隠れんに、誰れ知る人は有まじ。某一度義兵を擧げば、軍の習ひ敗軍すまじき物でもなし。是第一の隠所、敵を搜す便も有り。秘密の空洞木正八幡の御神託。伊東を始め近國の武士、逆も、心未だ一致せず、昨日の情今日の仇、今日の味方は翌日の敵。彼等にも猶匿まん」と、四邊の雪を掃寄て、空洞を埋む頼朝の程、人君の器量備つて、六十餘州を掌の内に握り給はん常々の、心掛こそ雷ならね。斯とは知らず谷々より立歸りく、侍御獲物は「と問ければ、然ればく。既に追詰捕て伏、一討にとせし所に、忽ち年老狐と變じ、峯を越て飛失せたり。流人となれば口惜や、源の頼朝が狐杯にも魅さるよ」と、實しやかに宣へば、伊東會澤竹の下藤内藤五齒嚙をなし、「エ、古狐の骨張め、最前に打殺し、皮引剥でくれんず物、無念千萬。ヤア此空洞木は心憎し。いでく入て搜せや」と、罵り騒げば頼朝重て、「ア、狐の出入洞の口、雪の埋まん様もなし。神通の獸なれば、空洞

瓶子限り徳利  
のあるだけ

和ぎ初し古今  
集の序文をとる

木共に狐の所爲、人を誑すも知難し。今日の殺生は頼朝が申し受るぞや。籠に降つて今一獻、疾々と宣へば、侍實にも可惜酔醒たり。瓶子限りに飲續け。御供せん」と獻酬す。若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山。頼朝は空洞木に、軍理の工夫を得給ひて、扱こそ山木が合戦に、命を免れ給ひしも、此空洞木に隠れたる、一時の慈悲も善心の、終には朽ぬ石橋山。雪も心も三重色深く、戀の道には鬱れ易き、伊東祐親が乙娘、藤の前は仁義を知り、忠節深き生れ附。佐殿は古への、御主筋ぞと傳きに、影をも踏す後にせず、膝も直さず慇懃に、堅い女の何時の間に、和ぎ初し大和歌、言葉のてには縁と成り、御寢室近く頼朝の、胤を身に持つ青梅や、心鬱病纈帶の、廻る日数も重なりて、七月にこそ成にけれ。父祐親は斯とも知らず、嫡子河津の祐重、二男祐清を招き、「妹藤の前が事當國の目代、山木の判官兼高より望まわ、早速婚禮有たき由、度々使に預れども、姫が病氣抄々しからず、延引に及びしが、此比は取分起居も重く見えれば、急に快氣も有るべからず。生田法眼春樂は姫が合醫者、殊に領内の住人、内外共に心安し。療治をも見立て、祝言を急ぐべし」と言ければ、祐重承り、「さん候。我々も左様に存じ、法眼を召し候へば、遠方へ療治に参りし由、飛脚を以て呼返させ候へ共、先も大事の病人とて、十

四枚肩一昇手の  
四人つける駕籠

長羽織一氣の長  
いにかく

一圓に一金く、  
とんと

日餘り相待共今日まで歸らず。他の醫者に掛られ然るべし」と云ければ、祐親大きに氣色を損じ、「我儘千萬なる醫者め哉。我領内に住からは、三日路五日路遠方に、如何なる病人有りとても、打捨て歸る筈。十日に餘つて遅參するは、言語同斷の慮外者。元首に繩附て引摺寄よ」と云ふ所へ、門外に四枚肩、「春樂お見舞」扱宜處」と祐清は玄關に立出、瑪ヤ法眼御出か。遅しとて父祐親、以ての外の不機嫌。早ふく」と促ても急ぬ醫者の心の長羽織、炮烙頭巾の縮緬皺、仲々と座敷へ通り、此中は度々御使下されてござれ共、寒天の時分なれば、彼處には疝氣が發つたは、此處には子が産れるは、此方の婆が二階から落られた事の、隣の嫁に子の妊る灸點してくれのと申して、一圓に寸暇を得ず。其上に五日路程、遠方へ療治に參り、唯今罷歸つた」と、言へども伊東返答せず。『姫君の御病氣とは、如何様にかな』と尋ぬれ共、猶顔揺て應對はず。春樂元來一徹者、「伊東殿のお召と聞き、とつかはとして參つたが、人違さうな」と、佛頂顔にて立んとす。祐清見かねて、「仔細を聞かすば道理々々。父祐親は貴殿の御出遅しと有る當座の恨、其斷申さるれば濟事」と云ひければ、『是祐清殿、慰みに醫者は致さぬぞ。春樂が匙一本で、照ても降ても十二人口糊ねばならぬ。伊東殿に我家内養ふては貰はず。藥

渡らひは一行  
かざらんや

十文盛一飯一杯  
の價

樂師如來一衆生  
の病思を救ひ給  
ふ佛なれば自分  
によせていよ

代取ると見附たら、琉球へも渡らひでは。領内に住むと思ひ、六尺共も我等も、道中の十文盛搔込だばかりで、宿へ著ても樂師如來ぞ。茶も喫ずに駈附た。此上のお恨みは、せうことない」とぞぞ呟きける。伊東眼に角を立て、「ヤア辯舌過た法眼。醫者の慣ひ遠國他國へ行は尤。祐親が用とならば先を振捨立歸るべき道ならずや。使を受けて十日餘り逗留せしは祐親を、疎略にするにあらずや」と、席を叩て怒れども、春樂少しも謝辭す、春「ム、扱は御存知なささうな。此度は三河の國矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃御前の氣色療治に參りしが、伊東殿より急なる御用、歸らねば叶はぬと、達て斷り申せ共、母の長者合點致さず。伊東殿は大名でも、押もおされもする身でなし。源氏左馬の頭義朝の八男牛若君、今奥州にて九郎義經と云ふ人を、髻に持たる長者なり。伊東の姫君藤の前は、頼朝と夫婦と聞く。互に源氏の相嫁、伊東の姫が大事なれば、長者が姫も大事なりと、理窟詰に止められ、夫故の逗留。いかなく、此春樂、不調法は仕らぬ。ア、言ても下さるな」と、張肘してぞ居たりける。祐親瀾と腹を立、「ヤア子供あれを聞け。何條矢矧の長者めが、伊東と相嫁なんどとは、緩意過たる言分。惣じて遠州濱名、三河の矢矧此兩所は、平家より御加増あり、十年以來祐親が知行にて、長者も我が百姓ならずや。此一兩



年長者めが、年頭八朔藏納、百姓並の禮式も、無禮なりと聞けるが、牛若とやら猿若とやらんを、聲に取たるるんけんな。彼の頼朝は昔の交誼、我が慈悲心にて隠匿しに、聲よ嫁よと綽名を立られ、平家の咎、山木が方への聞えと云ひ、皆長者めが言觸す。田地を取上げ知行所を追拂へ。證人なれば法眼、お手前も科は遁れぬ。早々矢矧へ使を立よ」と、氣色變つて見えければ、嫡子の祐重進み出で、「仰には候へ共、若し姫と佐殿と、夫婦のかららひ實にて候はば、世間の沙汰も偽ならず、却て此方の疎忽なり。先暫く御穩便然るべし」と制すれ共、父「否々夫叶ふべからず。頼朝を聲にせば、長者輩と縁者に成る。一門の參會にも、彼奴等と膝を組ん事、伊東の家の瑕瑾なり。我娘から穿鑿せん。局はなきか。姫を是へ連來れ」と、討ても捨べき顔色に、歸られもせず折悪く、參り係て法眼も、配劑仕かねて見えにける。局奥より走り出、「姫君様の御行儀の、悪いと申すも妾が科、氣の細い上藤の、御氣合に障れば一大事。先重ねての御詮議」と、事を解て詫げれ共、父「否々姫が身の難雪ぐ事、臆するは心得ず。ム、扱は頼朝と忍び會しに極つたり。病氣と云ふも懷妊ならん。法眼に脈察らせよ、早ふく」と責附られ、局も今は爲方なく、奥に入れば姫君も、「スハ死ぬる瀬か生る瀬の、産より怖き親兄の、假令不與は受く

擧ぐ一振舞ふ

浮中沈一脈の浮  
くと常と沈むと  
心肝腎一以上三  
臟は大切に命  
の門

合口一は首也、  
醫の脈を診る時  
は刀をささず

るとも、胎内の兒の親は、右兵衛の佐頼朝なり。陳する丈は陳じて見て、叶はぬ時は佐殿の、御名に疵は附まじき。卑怯は捌くまい物」と、思ひ詰ても使なく、女房達に手を曳かれ、父の前にぞ出給ふ。伊東は眼色を見て取て、父「サア法眼假令御邊が勞つても、外に醫者も有るもの、後に知れては其方が首を取るぞ。偽なしに早々脈」と詰掛る。姫も爰は大事ぞと、姫「幼少から自らが、地脈は其方が覺えてぞ。疎忽を言うては、頼朝様に首取らるよ。能う分別して脈取りや」と、苦々敷宣へば、流石の法眼手も戦ひ、浮中沈の三考も、心肝腎も命門も、右に有るやら左やら、病人よりも醫者殿の脈打斷るばかりなり。然れ共心を押鎖め、蚤何と御頭痛の氣味有て、冷々と惡寒などは參らぬか」姫「否別に左様の事もなし」蚤「ム、ウ御食に變る事もなく、酸い物などをお好はないか」姫「否否そふした事もなし」蚤「ム、ウ胸先へ時々ぬつと突上、臍の邊を滑々と、ぬらつく儀などは御座なきか」姫「チウ瘡は持病の事なれば、苦にも成ず」と宣へば、蚤「然れば先御懷胎とも申されぬ。然らば御脈」と合口脱ぎ、搦手をして、「ハアウム、ウ」と目を閉ぎ六脈靜に考ふれば、浮大にして活々と溢れたり。「南無三寶懷妊」と、言んとせしが「待暫し、言へば姫の恨あり、言ねば後の不調法」と、頭を傾くれば伊東親子、片唾を呑で目

を放さず。姫君は「神佛醫者の心に入換り、憐み給へ」と氣も亂れ、脈も狂へば法眼は、右を取替左へ替、「只ハアウ〜」と時間取て、心を摧く危さよ。父の伊東突と立ち法眼を突退、「汝は姫をかばふよな。此事平家へ聞えては、伊東が家の滅亡、娘が大事か國が大事か。いで〜實否を糺さん」と、娘の袖に手を指入纈帶擱んで、又扱こそ〜懐妊に極つたり。片時も是には叶はぬ。産月までは法眼に預け置く。其方にて平産させ、其後山木の判官兼高に、縁邊組み世間の口を閉ぐべし、我娘さへ斯くする上は、領内の矢矧の長者、義經を掣に取る事平家の咎。某が言譯なし。使を立て淨瑠璃姫とやらんを、急と追放せさすべし。法眼は一先づ藤の前を連れ歸れ。頼朝がせがれ胎内に有る中は、局は勿論侍婢の一人も附事は叶はぬぞ。サア女郎め其處立ぬか」と睨視られ、「あい〜」と云ふ聲よりも、涙ぞ先に出そめて、親の名残も身の憂も、「何のまよよ」と流せども、佐殿の御事のみ、心の底に滯ほり、暇乞さへ叶はねば、他事に詫けて、母母様へも何方へも、宜様に頼むぞや。唯さへ産は女の大事。心に苦を持つ自らが、よも生んとは思はれず。今日が此世の名残ぞと、申して給や」と計にて、聲をも立す泣給ふ。二人の兄も妹を、不便とは思へ共、苦り切たる親の顔。侍婢局聲々に、「法眼様頼みます」と泣叫

正氣散一粉藥の名にて仕やうに掛く  
灸も云々三里の灸にかく

國を療治一春樂は人を療するのみならず頼朝を助けて國をも治める、國語に上醫醫國云々

べば、「チ、人を助くる道なれば、是も療治の中なり」と、我乗輿に抱き乗せ、「昇夫共」と呼はれども、皆喫飯に歸つて草履取の三平ばかり。登能々汝先肩昇け。後肩は此法眼」と、坊主天窓の昇夫被、手先を揃へて、「おつ」と肩を正氣散。腰を据ては「はいく」掛毒散の風藥。是ぞ發汗乗物昇。裾を揃けて行足の、灸も道も三里半、飛ぶが如くに歸りけり。

### 下之卷

國を療治の流行醫者、法眼が藥飲む人は、長生不老門前に、藥代禮物持せきて、藥調台暇もなく、弟子の春甫が藥研の音、轟然賑ひ忙はし。春甫粉藥搔回し「女房共は放恣と、何處にのらをかはいて居る。醫者の女房に成からは、飾ふたり刻んだり、藥拵へせねばならぬ。粉藥が急ぐ。來て篩へ」とぞ喚ける。女ハテ何ぢやいの、姦ましい。藤の前様の御用がある。是も御主の御奉公。此方は醫者の女房、此方は直に醫者でないか。何時がいつ迄藥研おろしつ確挽つ、それで埒が明ますか。お師匠なり御主なり、法眼様の手助

大成論云々皆  
漢法醫の用ふる  
醫書

對の六尺云々  
見掛の良い醫者  
もあてにならぬ  
をいふ

數に功者一數は  
數に者、之は謬  
にて豈知野夫  
有功者也より  
出てたり(三國  
志)

吹屋一銅を吹き  
わくるを薬とす  
る者

伏漬一石を附け  
て水底に沈めらる

り、代脈にも出る様に、學問をさつしやれたら、宜りそふな」と言ひければ、直「ヤイ學問ばかりで濟はせぬ。醫者は機轉が第一じや。學問の事なら言て來い。大成論、格致論、素問靈樞、十四經、入門、難經、脾胃論、脈論、運氣論、萬卷の書に眼を曝した此坊主。醫者は見掛に依らぬぞ。對の六尺乗物の、煎じて飲むよ物でもない。一僕連ぬ我々でも藪に功の者。何な大病でも仰附られ。活すか殺すか何方へぞ驗は見せふ」と自慢する。女「ハア措て貰ひましたよ。彼の頼朝様とやはは、醫者心はなけれ共、藤の前様と假初の契りに、まんまと孕せ、物の見事な若君が生れた。此方と妾とは旦那様の媒約で、頓て三年添けれど、何とやうな療治やら、妊娠する事もならぬは、定めし如才も有まいが、地體良人の匙先がゆがんださうな」と言ければ、直「やれ子の娠ぬは和女が科よ。芋や牛蒡を見をらぬか。何程種が能うても、畠に鐵氣の有る所は、何ほう蒔ても生熟ぬ。此方も牛蒡同然、蒔てもく熟ぬは、和女が何處ぞに、銅の吹屋が棲んだそふな」とて、夫婦どつとぞ笑ひける。此聲に藤の前、障子押開出たまひ、屢聞ば御身達、子が望いとの願かや。自らが身と代りたや。法眼のお陰にて、玉の様なる男兒を、安々と分娩せしに、平家の聞え有ばとて、父の爲にも孫ならずや。最愛盛りを情なく、松川の水底に、伏漬

萬の病云々以下三句皆謎にて何れも世を樂観する意

に沈めたまふ。是よりは方々の、子の無いこそは増ならめ。此上に山木の判官兼高へ、縁組との事なれ共、斯様に氣色重ければ、何時までか法眼や、方々の苦勞ぞ」と、打萎れてぞ仰せける。春甫は氣輕に打笑ひ、「ア、お氣の弱ひ。子の五人や十人は、地幅さへ能ければ年々にも出来る事。兎角畑の荒ぬ様に、氣を爽然と成次第。萬の病は心から。一寸先は闇の夜、浮世は一分五厘づつ。人參入て上たらば、御本復」とぞ申しける。斯る處に「法眼御歸り」と呼はれば、春甫が女房迎へに出、乗物蒲團藥箱、床に直しつ衣桁に掛け、姫君のお供して、奥の一室に入にけり。法眼四邊を見廻し、春甫を招き「藤の前の御容體、如何有ぞ」と問ければ、「然れば御顔色物ごしまで唯當分の物思ひに、氣の滯ほりと存ずれば、香附子杯にて血を開き、順氣の御療治然るべし」とぞ申しける。法眼首を振て、「否く、輕症にてなし。某家傳の名法有」と、篋笥の内より、二重箱の一巻を取出す。法「是ぞ祕密の藥法。此通りに一貼調合せよ」と、差出す。春甫熟々披見して、「ヤア此藥味は残らず石藥韓藥に、毒蟲などの處方は、毒藥にては候はぬか」と、言せも果す、法「ア、音高し音たかし。如何にも毒藥、即ち藤の前に與へて、失ひ申す毒なれ共、某は師匠より、毒藥調合致すまじと、堅き誓詞有るゆる、法は傳授受ながら、匙と

ることは叶はず。其方には誓詞も書せねば、匙を取ても苦しからず。調合せよ」と言ひければ、春甫は猶も不審顔。「して姫君には、何恨み何罪有て毒害は遊ばすやらん」法ヲ不審尤。某に對し恨も罪科も更になし。姫君の母は繼母なるが、山木の判官兼高は、大名と云ひ當國の目代。彼に繼子を縁に附、世に在せんは嫉しよ。毒害して吳ふならば、金銀財寶倉庫一箇所を、打上んとの頼なり。老衰の此法眼、朝から晩まで乗物に揺れ、夜とも言ず引起され、雨にも風にも國中を駈廻り、苦勞をするも本望ならず。此姫君を失ひ、其禮物にて療治を止め、永からぬ一生を、樂に暮す思案にて、請合たる毒藥。師匠の奉公此時ぞ。早々調合頼むぞ」と、細々と語りける。春甫涙をはらくと流し、情なや御心に、天魔が入て候ふな。尤老後を安樂の、御望みは尤ながら、醫道に限らず世の中の、人の爲になるものの、苦勞せぬは候はず。人の爲かと存ずれば、却て我身後世の爲、善惡共に報の回れること、藥の廻るより猶早し。天罰と申し、母御こそ繼母なれ、伊東殿は實父なり。洩聞えて伊東殿の、御咎遁れ有べきか。とつくと御思案候ふて、思止まり給へかし」と、咽び入て教訓す。法眼はつたと睨んで、「汝が言分皆法眼が知つたる事。天罰當らば匙を執たる、汝にこそ當るべけれ。伊東の咎有るとても、汝を取て落

汝を取て云々  
汝を罪に落さん  
ため

讃人―譏晒し者

さん爲、調合を申し附く。扱こそ師匠の奉公、頼むとは言つるが、但我身をかばふかと、面色變て言ひ募る。弟子は泣々聲を荒らけ、「彌情ない師匠やな。師弟は親子と申さぬか。弟子の難儀に代る程の、心こそはなくとも、我科を弟子に塗る無得心や候ふべき。簡程慈悲心なき師匠に、孝を盡して面白からず。毒藥の調合は斷然と叶ひ候はず」と、申し切てぞ泣居たる。法眼溜息ほつと吐、「ハア世俗の醫に言ふごとく、咽元過て熱さ忘るよとは此事。汝が口から法眼を、慈悲心なしとは畜生め。五年以前を忘れたか。一年某下總へ、療治に立越歸るさに、石橋山を通りしは、極月中旬而も大雪、切程寒き寒天に、汝は襦袢を身に纏ひ、空洞木の中より、よろりくと這出、世にも人にも捨られ、便りもない業人、長々脚氣を煩ひ、其上此寒濕に腹を痛み、今を限りの命なれ共、雪より外に口を潤す物もなく、今生よりの餓鬼道。お醫者様の御慈悲に、軒の下にて死する様に、御憐愍頼み奉ると、泣叫びしが不便さに、持せし著替の小袖を着せ、乗物には汝を乗せ、老體の某は、雪の中を徒跣足。宿へ著ては看病人を附置き、衣類食物起臥まで、我子の如く勞り、千貼計の藥に、朝鮮人參三斤半。二年目に本復して以前より達者に成り、鬼とも組んと悦びし、其間の心遣ひ。法眼は慈悲を知らぬよな。ヤア是でも慈



知音一知己、鐘  
子期死、伯牙絕  
絳の故事に基  
く

生姜云々生姜  
は毒消なり、又  
鐘の口を北向に  
するは病氣重く  
なる呪なり

悲を知らぬか。親類も知音もなく、行方もなしと云ふ故に、弟子となして醫道を教へ、數年使ひし侍婢と、夫婦になして其の如く、腰の周、身のまはり、是此法眼は何く違ふ處がある。年來の御恩徳、此世にては報じ難し。御一生の御大事御命に代らんと、幾度か吐せしぞ。汝に禮を受んとて、懸たる恩には有ね共、慈悲心なしと云ふ故に、事新しき繰言。サア法眼が慈悲を知らぬか。汝が恩を知らぬか。根性に問へ」と言捨て、突と立て入んとする、師匠の羽織に絶附、馬ア、眞平謝罪奉る。御恩は更々忘れねども、悪事の御意見申さん爲、言葉過せし勿體なや。御赦しあれ御免あれ。身は八裂に截裂れ、八萬地獄に落るとも、毒藥調合致すべし。免させ給へ御師匠様」と、羽織の裾を顔に當、しやくり上げてぞ歎きける。法眼も聞入て、「チ、尤々其咎」と、又一箱の錠を開け、藥種數品取出す。春甫は書物に引合せ、毒の品々調合し、馬思へば此匙は劍よりも怖しき。罪科なき人を殺すぞ」と、涙も共に包紙、「女房々々」と呼出し、「是姫君の加減のお藥。生姜入らずに藥罐を北向に、頭煎じ計を、早々上よ」と言ひければ、馬ア、お目出度や。追附御快氣なるべし」と、何心なく走り行く。法眼見送り、「サア仕濟した。毒藥五體に浸渡らば、苦痛有ん其時に、報せを待ぞ、ぬかるな」と、調合の間に入にけり。

春甫ははつと氣拔して、夢現とも辨へず、茫然として居たりしが、真誠のや人恩を受け此世にて報ぜざれば、未來生々五百生、筋を脱れ皮を剥れ、取返さると傳聞く。師匠法眼の廣大の御恩は、唯今命の用に立、百が一つも報ずべし。先年石橋山にて討るべきを、頼朝公の情にて、空洞に命を助りし、此御恩を報ぜぬのみか、最愛の姫君に、毒藥を盛る此惡業。仇を恩にて報ずるところは言へ、恩を仇にて報ずるとは、何の道にか有べきぞ。一百三十六地獄、地獄々々を尋ても、此罪科に對用する、地獄とてはよもあらじ。淺猿しの罪業や」と、思へば心遺瀨なく、身を揉敷き沈みしが、「ア、由なき悔み言。身を助からんと思ふにこそ。姫君の御藥、飲込給ふを合圖に、此比首腹に突込、冥途の旅の御供し、生て師匠の恩を報り、死して頼朝の御報恩に供へん」と、目を押し拭ひ比首拔持、障子の隙より差覗けば、痛はしや姫君は、今殺すとは知り給はず、花見小袖の雛形を、手自畫て御座ます、御有様ぞ哀れなる。女房藥を煎じ上げ「是は法眼と妾が夫、師弟談合の加減のお藥。いざ御飲ませ」と出すにぞ、嬉しけに莞爾と、此御藥にて本復し、春は花見に往うぞや。其方と我が小袖の模様、對に揃へるは見や」と、藥頼みに末計畫、是ぞ冥途の呼使と、知り給はぬぞ痛はしき。春甫は「御最期唯今ぞ」と、口

親子の所爲―親子が歎味方となるは致し方なし

に御經目に涙、「すはやく」と待つところ、姫君樂を戴きて、喉に通ると見えけるが、「あら心悪や眩暈や。胸痛や喃苦しや」と顛倒ある。女房驚き懷抱へ、「法眼様春甫殿ちやつとく」と呼ばれば、重「チ、春甫は是に在り六道の御供」と、比首腹に突立んとせし處に、法眼駈出、「否御供は某」と、比首捻取突立んとする所を、又繩附、「毒藥の匙執は此春甫。我ぞ死ん」法「否我こそ」重「我こそく」と捻合々々、終に師匠に捻取れ重「喃お師匠様まだ腹立が止めぬか。我ぞ死せて御厚恩、報らせて給たまへ」と、撞と伏して泣きければ、師匠は弟子の心を感じ、暫時涙に暮けるが、法「欲に耽つて法眼が、毒藥をもつたと思ふかや。恥かしや、繼母の頼みと言も偽り。忝くも源氏の大將頼朝公、枕を竝べ御子をなせし、最愛の姫君を、平家の侍山木輩が、奥よ妻よと言はせん事、末代の謗氏の瑾。御父義朝の御臺常盤御前も、清盛が妻と成てこそ、憂恥を見給ひし。我等が先祖も源氏の御家人。骨髓に徹つて無念なれども、親子の所爲は詮方なし。僅の女性一人に、源氏の名を流さんより、御自害を勧めんとは思ひしかども、御心を度かね、扱こそ毒藥もりしなり。然れども藥方相傳の時、匙を執て調合せば、生々の父母を、永劫奈落に沈んと、書いたる誓詞の兩親の、業苦の程の悲しさに、匙は汝に執せしが、毒害せ

しは法眼。源氏の恥辱雪ぐからは、今生の思出。主君の妻に毒を盛り、其罪科を弟子に塗る、法眼にてはなき物を。冥途のお供迄もなし、先走致さん」と、突込まんとする手に取附て、直有難き御心。去ながら夫は師匠の道立て、我等が弟子の孝行立す。此上の御恩に、春市に死なせて下され」と、師弟心を感じ合、不覺の涙はせきあへず。今を限りの藤の前、苦しき息の下よりも、屬頼母しの人々や。假令自ら千年百年存命ても、所天に恥辱を取せて、何の生甲斐有るべきぞ。山木へ縁に附くならば、一日も生きまいと、豫て死身に極めたれば、此毒害に怨はなし。自害を思ひ止りて、頼朝様をみついでたも、淨瑠璃御前と義經様と、中斷れしも父の所爲、自ら故の事なれば、此二つを頼み置く。頼朝様へも言度こと數々ながら最う耐らぬ」氣も遠うなる眼も眊む。漸々に聲弱り、「死んで給んなたもんな」と、夕霧闇き短夜の、宵の夢とぞ滅給ふ。痛はしかりける最期なり。師弟は猶も義を重んじ、甚いざ此上は一人残つて遺言守り、一人は是非死なん」直實に我死ん」と死を争ふ。女房涙に眩ながら、「御遺言重ければ、お二人を百人にも、仕度程なる大事の身。死なで叶はぬ義理ならば、在て益なき女の身。妾こそ」と言も敢ず、餘りし毒藥突と呑む。師弟「是れはく」と言間も、あら苦しやと身を悶え、五體變じて紫に、

夕霧—らにか

伊達小袖―はて  
やかなる小袖  
縞子びん―縞子  
髪とて安永年間  
に行はれし髪な  
るを當時のもの  
にしたり  
六つ武藏―十六  
武藏ともいふ子  
供の遊戯  
押へ―去んがり  
紫のゆかり―三  
河の八橋にて紫

眼を凝視齒を切り、ぎやつと計を最期にて、同じ枕に臥しければ、ものに動せぬ弟子師匠、二人の死骸に抱附、前後不覺に取亂し、大聲揚て歎きしは、道理とこそ聞えけれ法「ア、我ながら狼狽たり。伊東が方へ聞えては、君の御爲如何なり。先死骸を葬むり佐殿を密に落し參らせ、北條の四郎時政を憑み、御謀反勸め奉らん」と、忍びくの謀扱こそ頼朝御代の後、此師弟に恩賞深く、法眼は醫道を以て忠有連、醫法と召れ、弟子は義を以て誠有とて、義法と召れ、頼朝の膝下去らず、醫法義法の法師武者、名を千歳にぞ三重揚にける。其白幡に従ひて、坂東八箇國、頼朝の御手に屬し、討て登り給ふ由奥州に聞えしかば、九郎御曹司義經、秀衡が催しにて、奥勢十萬餘騎を參らす。義經御悦喜淺からず、頼朝の見參に入り、御代官を蒙るまでは、物の具憚り有るべしと、御供の上下残りなく、鎧の上の伊達小袖、兜を脱で太髻結、鬚附縞子びん天鷲絨脚半、駒も嘶ふる響の音、しやんくくと振出す。七つ道具に六つ武藏、辨慶は押の役。八つ鎧持挾箱、持鎧持弓梓弓、引もちぎらぬ行列は、柳を手折門出や、花の都に三重登らるよ。彼紫の由縁求て杜若、三河の國に御陣を召され、峯の薬師に御參詣立歸らんと仕給ふ處へ、淨瑠璃御前の女房達、有明更科帥の典侍、空冷月清千壽の前、長柄の銚子御

午が唐衣きつゝ、  
剛れにしの歌を  
よみし話

引著られし一矢  
を引くに掛けて  
いふ  
淵瀬一世の中は  
何か常なる飛鳥  
川の歌による

土器、蓬萊の島臺携へ、「母の長者御上洛を待受、御首途を祝ひ申せとて、迎ひ参らせ候。目出度聞召れよや。千秋樂」とぞ祝ひける。義經聞給ひ、「唯今其方へと思ふ折柄、義經が好物とて歴々色ある女房達、御使に給はる段返すく満足。追附参つて淨瑠璃にも對面せん。各先へ」と宣へば、有明更科承はり、「扱は御存知候はぬか。關東の目代山木の判官地頭なれば、伊東の祐親より吟味厳しく、源氏方の縁組を、堅く改め申す故、淨瑠璃様は先暫時、御遁世と披露して、彼谷陰の庵室に、忍びて御入候らへば、此度の御下山は、御慎ましめて、頓て目出度平家を亡し、御凱陣の時分は、世間廣ふ御對面。夫を心のお力にて、戦に打勝給へや。先御銚子」と言ければ、義經驚き、「否々夫は誠しからず。行末知れぬ源氏なれば、時めく平家の大名に、引著られし矢矧の姫。一夜に變る淵瀬こそ、大和に有ると聞けるが、何時東路の飛鳥川、底意の程の悪さよ」と、恨み類墮給ひける。

冷泉節

妾が君一淨瑠璃姫

蒲原宿一鏡經囀  
に此所にて煩ひしを淨瑠璃に助けられし時眞名を明し追て平家追討に上るよしを告げて別れし事十二段に見ゆ風吹—あらしに掛く

斯る處に年の齡、三十餘りの尼二人、花の帽子に五條袈裟、濃墨染に身を窶し、左手には花籠、右手には珠數を爪繰りて、御曹司の御前間近く参りつゝ、涙に物を語らせて、差伏面てぞ居たりける。御曹司は御覽じて、「彼なるは冷泉か。十五夜にては非ざるか。扱も久しの冷泉や。扱淨瑠璃は」と問せ給へば、二人の比丘尼承り、「目出度は東の殿。扱拙きは妾が君にて止めたり。御身東へ下向の時、まだ音も馴ぬ蟬折の、一よ重ねし妻琴や。扱又は駿河の國、蒲原宿の約束が、伊豆の伊東へ洩聞へ、日は五十人夜は百人の番衆を附、何國へ成とも、紛れ行や淨瑠璃と、日に幾度か使立。今は爲方嵐吹、峯の藥師の篠谷とて、人も通はぬ谷陰に、竹の柱や松葉垣、柴の編戸に引籠り、里の便も聞ざれば、池の眞孤を片敷の、肌を隠す苔衣。澤邊に降ては根芹を摘み、山田の畔に落穂を拾ひ、繫ぐ命の憂三年。今や音便、今や便宜と待宵の、夢の通路絶果て、御曹司戀しやと、其戀風が積り來て、無常の風の病ふの床、遂に果敢なく成給ひ、彼篠谷の苔の下、若木の花は散果て、跡には名のみ有明の、十五夜冷泉が身の有様、是御覽ぜ」と計にて、岸波と伏して泣ければ、有明更科帥のすけ、其外の女房達、「何を隠さん我々も、君を祝ひ参らせて、斯は扮装候へ共、變し姿を御覽せよ」と、禰禰脱れば墨の袈裟、柳の鬘入髪

## 卵塔―五輪塔

遊品―羅王の女  
八歳にして成佛  
せし由を述べた  
る經文。  
忽然之間云々―  
提婆品に、龍女  
忽然之間變成  
男子。  
兄弟見參―義經  
實瀧川にて始て  
兄頼朝に對面の  
由盛衰記に見ゆ

は、解て亂れて斷切の、哀れ悲しき有様に、義「扱は實か不便やな。切て今般の遺物ご」と、二人の尼に縋附、聲も惜まず泣給ふ。痛はしかりける次第なり。程有て義經、「切て亡人の記念成とも、見せてくれよ」と宣へば、玄彼卵塔こそ御墓所。亡骸を灰となし御骨を納め一年君と同衾の夜の、御肌著を幡に縫ひ、土中に籠置候ふなり。いざ御案内申さん」と、泣々谷を分過て、卵塔開かせ水手向け、暫時御回向有りけるが、義「如何に方方、思へば淨瑠璃は御出陣の、守護神と覺るぞや。人間の習ひ恩愛執著に命を惜み、思はぬ卑怯も取事あり。聞ば兄頼朝が妻、伊東が娘も死したるとかや。兄弟浮世に執著なく、一命を輕んじて、平家をやすく亡ほさん、天の示命有難し」と、女人成佛の提婆品、高音に遊ばし、忽然之間變成男子と、讀上給へば、不思議や五輪飛碎けて、光明赫々たる其中に、衣裳の幡翻して、成佛の相を現せしは三重有難かりける經力なり。斯る處に武藏坊辨慶、龜井片岡伊勢駿河、追々に馳來り、「右兵衛の佐殿は、浮島が原に御著陣の由、早御旗を立らか、御發向然るべし」とぞ申しける。義「扱こそ唯今申しつる、吉左右は是成ぞ。兄弟見參始めてぞや。いざ聲花に出立べし」と、御馬牽立御弓張り、御旗竿を押立、御旗附んとせし處に、あら有難や墓に掛りし佛の幡、翻りくと



閃いて、旗竿に掛ると見えしが、小袖の模様旗の手は、はらりくと落散て、忽地源氏の白旗に、薬師の梵字ありくく、有難しく。薬師は東方源氏も東國、日本固より東の國土、西海四海の敵を滅し、源氏一統御代萬歳、五穀豊饒の日の光、君が威勢の恵みに據て、光輝を添る淨瑠璃の、魂の徳こそ目出度けれ。

